

演題 33. FISH 法による遺伝子異常の検索が有用であった脳腫瘍の 2 例

○小野寺清隆 小山芳徳 安達純世 本間志保 渡邊孝子 鈴木学 麻生晃 (帝京大学ちば総合医療センター病理部)

【はじめに】FISH 法による遺伝子異常の検索が、術後化学療法の方針決定に有用であった脳腫瘍の症例 2 例について報告する。

【症例 1】50 歳代、女性。左前頭葉腫瘍摘出術施行。組織学的には、核周囲明暈を伴う腫瘍細胞が脳実質内に瀰漫性に増殖していた。

病理組織診断は oligodendroglioma (WHO grade II) であった。

FISH 法による染色体異常の検索では、腫瘍細胞における 1 番染色体短腕ならびに 19 番染色体長腕欠失 (1p19q loss) を認めた。

【症例 2】40 歳代、男性。右前頭葉腫瘍摘出術施行。組織学的には、出血や軽度海綿状変化と共にグリア細胞の高度な浸潤を認め、一部核腫大や核型不整を伴っていた。病理組織診断は astrocytoma (WHO grade II) であったが、FISH 法による染色体異常の検索では、腫瘍細胞における 1p19q loss が確認された。

【まとめ】近年、1 番染色体短腕 (1p) および 19 番染色体長腕 (19q) の欠失を示す oligodendroglioma に対し、procarbazine、CCNU、vincristine を併用した化学療法 (PCV 療法) の有用性が示され、その診断には FISH 法が有用である。この染色体異常は、oligodendroglioma に特徴的とされていたが、その他の glioma でも時に見い出されることがあり、このような症例においても PCV 療法が有効とされている。治療選択と予後の面から、今後 FISH 法による glioma の染色体異常の検索が必要不可欠なものとなりつつある。

(連絡先 0436-62-1211 内線 1263)